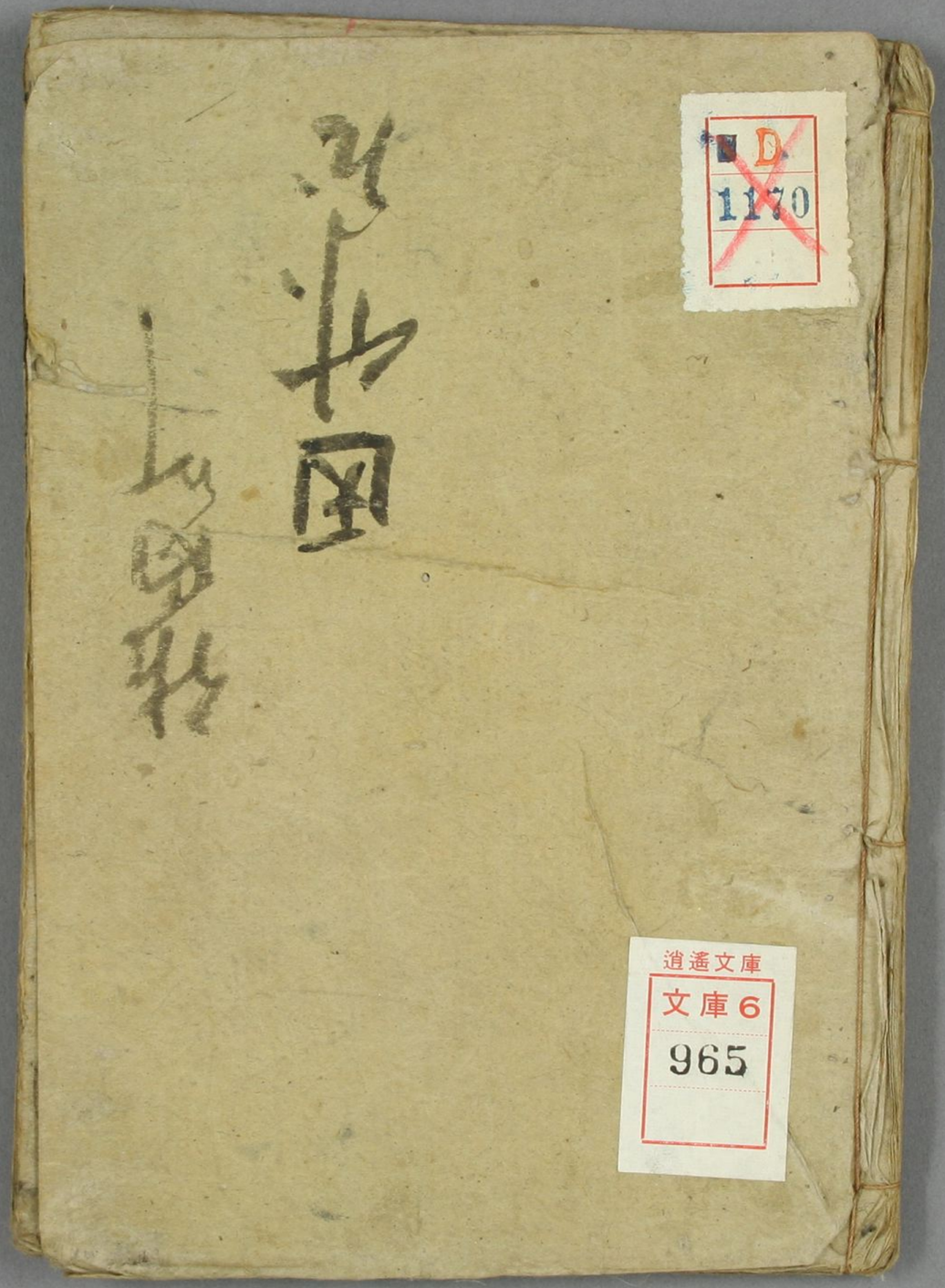

D
1170
逍遙文庫
文庫6
965

文庫6
965

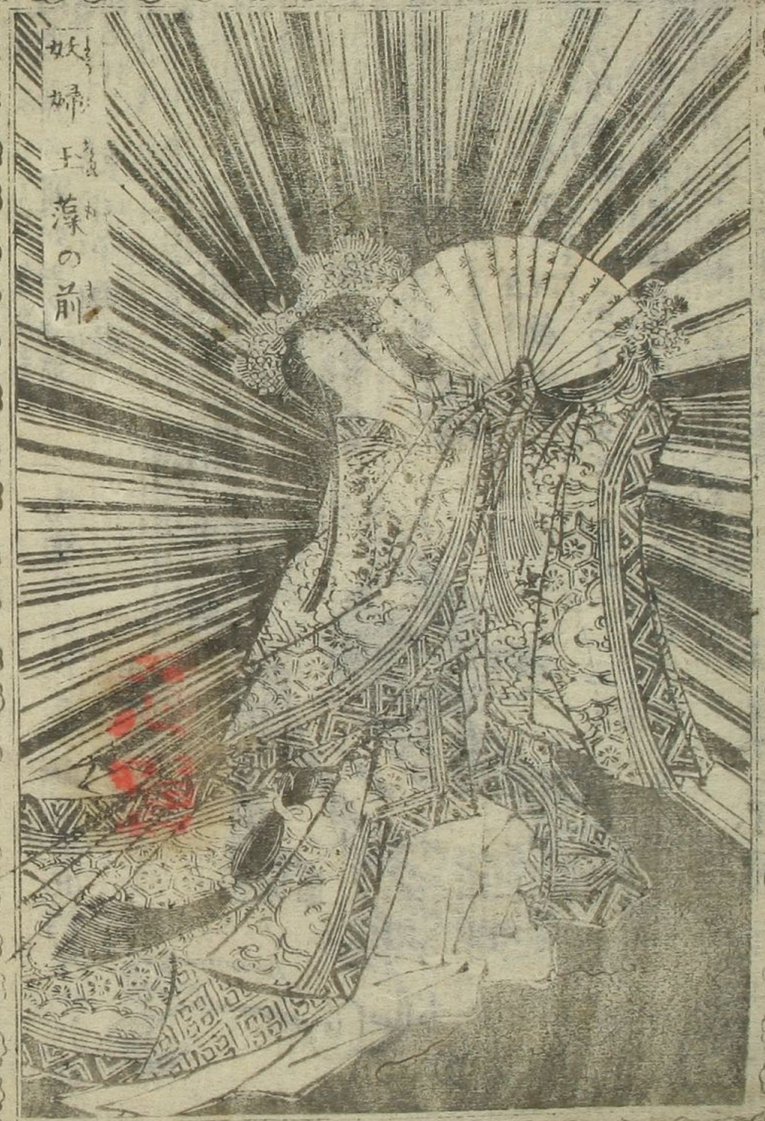
近衛帝の寵妃玉藻前
狐と化して東国那須野
に出て其霊石となりて
たゝるといひつたへしは久壽年
中の事なりしと源翁和尚其
霊石をあつめしに後深草帝
宝治年中の事とあらはれ
久壽より宝治にいたるまで其間
一百餘年なり此稗史は
宝治の頃再妖狐老女にかりて災をなす
記し安達が原黒塚の怪談を附会して一部の小説とも
実是戯場の狂言に類し児女の徒然を慰む
のみなり

文化四年丁卯五月稿成
同五年戊辰正月発行

山東京傳述

照魔鏡

馬喰町二町目 永寿堂西村屋與八梓行


妖婦玉藻の前

金毛白面
九尾之
妖狐
法法壇壁端的原本来面目未
曾藏現成公案大雖事異類中
行住度量
丁卯夏五緑

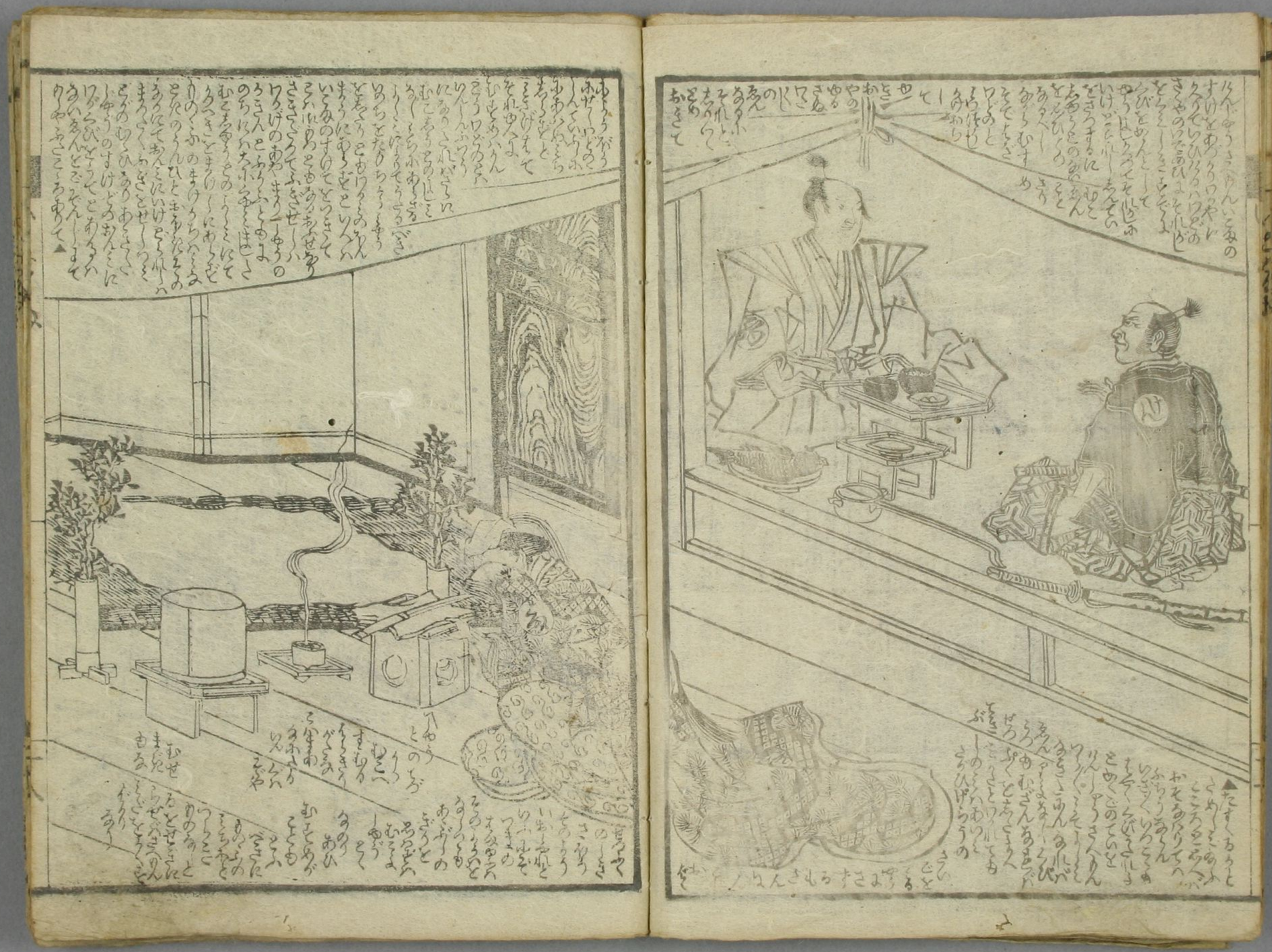
大木集
乃おわさ那須の
庚申の矢
さりびか
のがれは
康の
たうぞ
きと
信實
三浦太郎光村

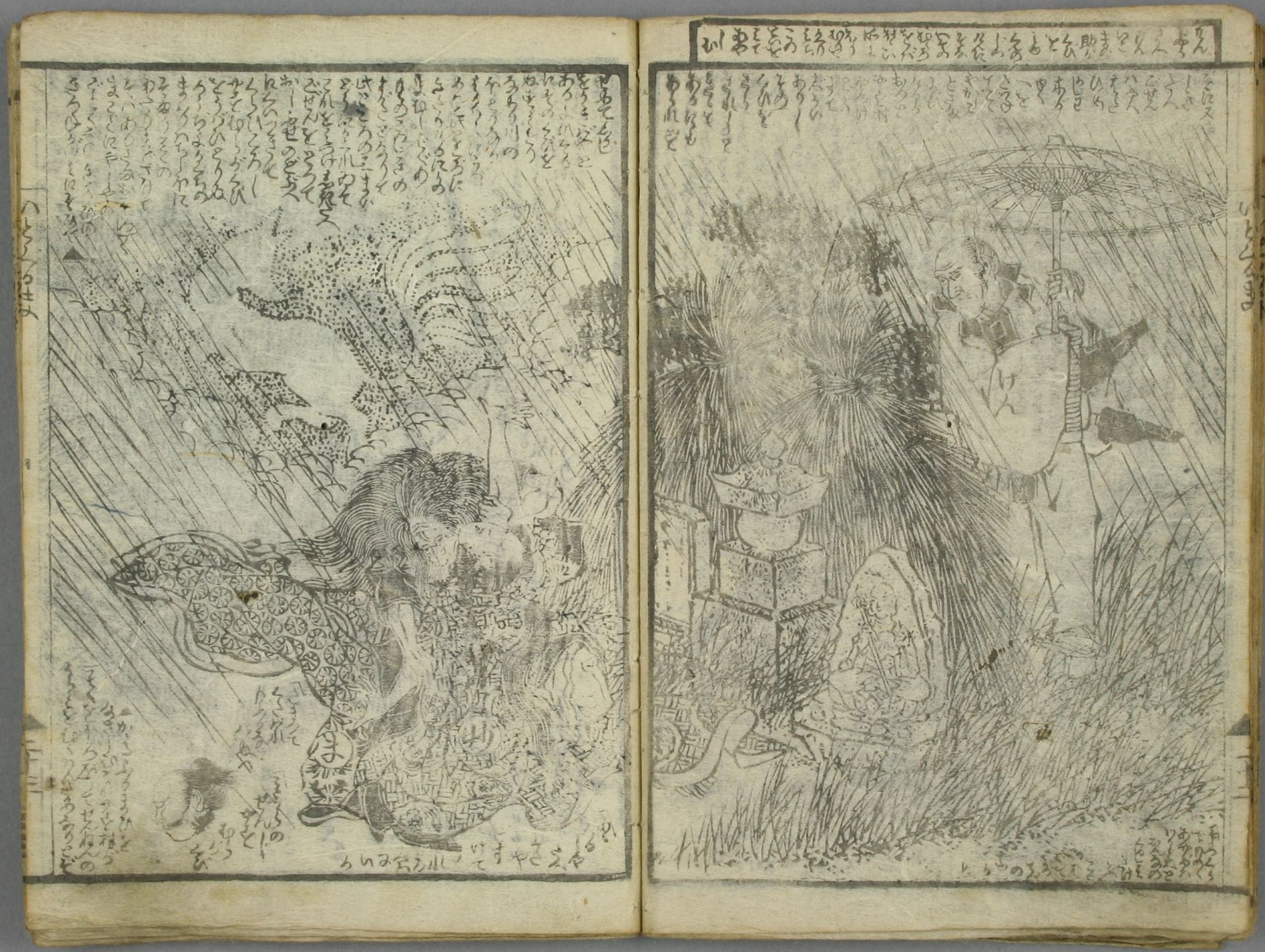
春風亭柳枝
作
老景烏雲記
若狭
玄城堂の年あれ
とそたの雷
仇をまろとと
君をとゝ
ゝまて
獄小君
子潽童
玉縄生駒之助妻
袖萩

軍記

ここにみこ〻〻のぜんしゅとむ〻〻ゆしむこと〻うのあるこゝろ村はいとゝ
おりのふわつくこゝ〻〻〻〻〻〻〻〻るこゝをおり〻るゝゆゝのぞうちう
ゆそやゝこのこうぞうをきいて大ふおこゝろきゆゆうしやはあこゝろりこゝてれ
とてゝぞひろこゝねをこゝぜてゝもせこゝうゆゝうゝゝときけばゝゝゝ父ゆゝと村と
ゝゝぞめゝぞくゝこゝかゝとゝゝゝれとゝゝゝゝこゝゝゝゝるれどもいゝはわふゝもゝこゝこと
ゝゝこゝゝゝゝ

○それはさてもさこそ又いこるの助八るの子はつけどうにせつそく
わしとつまらぬ、まごそんあるうにて秋田城之助のやくさにそくられあるといふうきそ波と
ちひ何とそやとれとうばひ出さんとあるを秋田城之助の家にはけんもまれ清門と
かの母さに思ひみんとうかひりるとうしとおまうの助の家にはけんもまれ清門と
又老人やと村のごんとうとせんぎのためつぎと伝をとれむとたづひうそめんぜそん
せたうまにそくそくとろに来ぬるまいこるの助ぎあやしとおもぎさとろけのうそんとんと
つきてあとあけるゞいこるの助八大力のひらりのかれば、こととせぞつひにけんおやう
れ清つとうせ一らせびとかんとうめんづきんをうり月のうみてかんどれびてまこそ
なぎがおつのうやうれびと白してあとそのゆうよまれうちにさをりんいこるの助を
そこはんしてひざのちさにおつしきたのびづきんとかるがうそくくれびけづむこうれびとしこそ
おごろにんぶじてそるちやんともひしゞんとも小係ときさだのらうとう大ぜいこれも
かと村のごんとうとそるんたち武所へ和まろにきたろ山やとそのけこれべけん
あるうんは門せびちくいこるの助にあるうるんのまんにいぞし
ゆしとさゝゆうぶいけどうしへぞうんのてぐろうとみうちそのかうれあづけ
ろうとあいぞこびうそいぞとそひつけあひな





下野の国
かぐらの宮
三浦大郎光村

とんぼの
りんハ
さいうせ
あやりの
まえもりの
まつぶくえ
あんにやろ
とれさと
かーらふ
三つの
とりが
とくらた
ひよの
かひと
りまくて
ひころの
ごろんにくろ
ろんりくんのろの
のろさとろんーせーに
いけのかとりにれみのの
ひろりきーあんきんりくろくろ ひつころるあて
いけのエりくとこらホうづきこどてんてろくえ
まるかさこれにエりのまんあろくこあるこそ
りんのろんでんにいんーこまやめのまつこあそ
やこそひてりちころみつちとエりまえのりんちり
ろりつけうひきんろーりよかこをさぶうてあろえ
ろうまちきせろーそくれさうろくようエりまえの
ろうまちきせろーそくれさうろくようエりまえの
ろうまちきせろーそくれさうろくようエりまえの

玉ゆら人

やとう

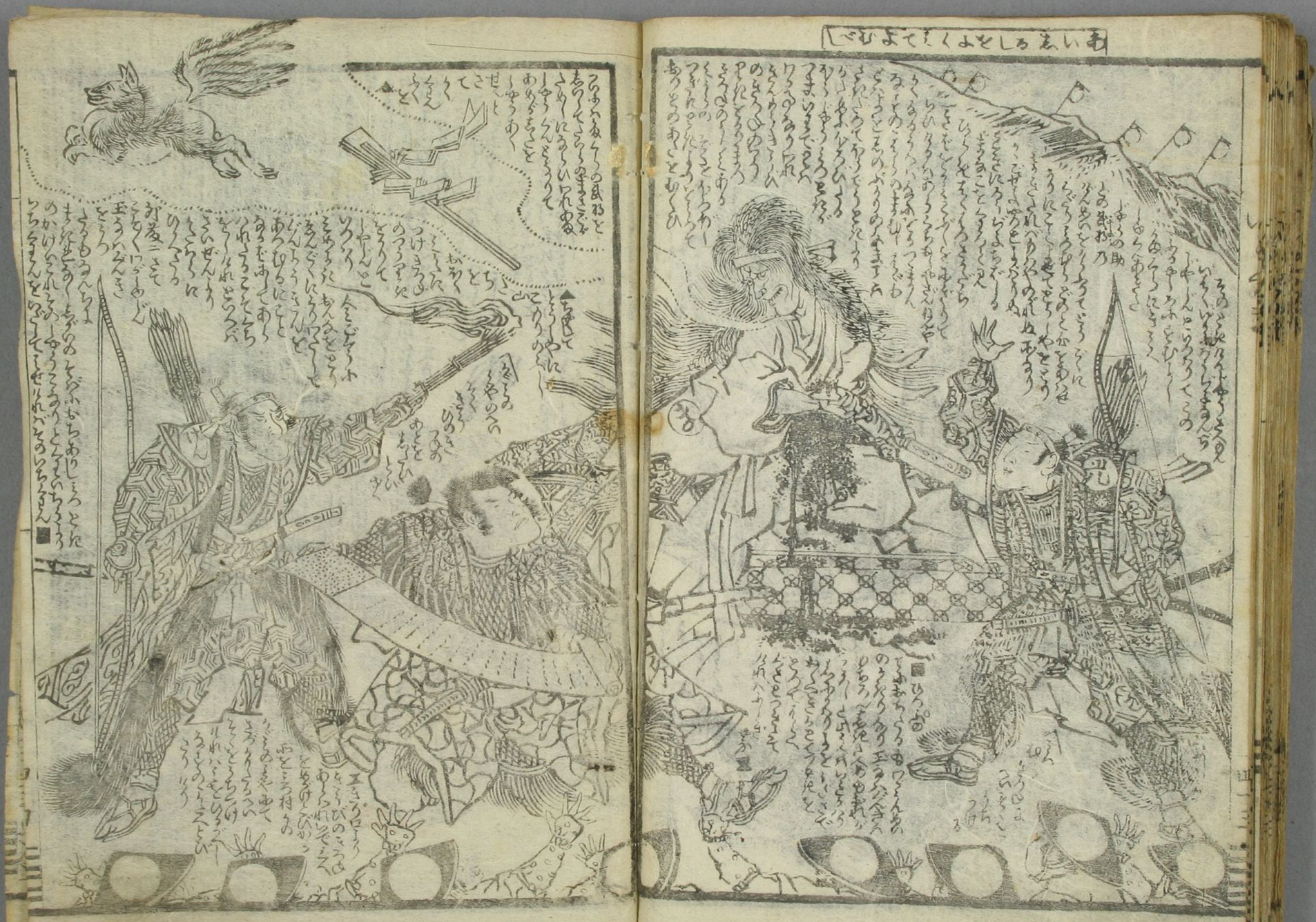
京傳作

曲豆圖画

京傳店

きぬ

そ



いとくるま

豊國画

山東京傳作

彫工 小泉新八

山海経巻之一 南山経之東三百里曰青丘之山有獣焉其状如狐而九尾其音如嬰兒能食人

永壽堂

江戸馬喰町二丁目 西村與八板

早稲田大学図書館
011688991341